

# 外国語授業分析法の概観と英語授業評価基準の提案

## A Brief Survey of Language Classroom Observation and a Proposal of Assessment Criteria for English Teaching

杉 森 幹 彦

はじめに

- I. 授業の構成要素
- II. 授業分析法の概観と考察
  1. 授業研究
  2. 授業分析の歴史
  3. アクション・リサーチについて
- III. 授業評価基準の作成
- IV. 授業観察・評価観点項目採点表
- V. 「英語授業分析指導演習」講座と院生による  
模擬授業・授業分析・評価の演習について
  1. 授業の概要と目的
  2. 模擬授業について
  3. 英語科教員に求められること

おわりに

### はじめに

日本における英語教育の流れを振り返ってみると、その主な教授理論は文法訳読方式から始まり、言語習得に焦点を当てたオーディオリンガル・アプローチ、コミュニケーション重視のコミュニカティブ・アプローチ、そしてコンピュータを活用した Computer-Assisted Language Learning (CALL) 等が主流となり、英語教育に関する研究もこれらの教授法の研究が中心であった。これは教師が教材や教具を如何にうまく扱い、生徒のモチベーションを高めて学習成果を上げるかという観点に焦点を当てた、あくまでも教師主導型授業法の研究であったと考えられる。英語教育関連の諸学会では、よく模範的な授業が公開され、参加者はその華々しい授業

に感銘を受け、自分も何とか真似をしてやってみようと試みたことであろう。ではこのようなモデル授業はなぜ生徒が生き生きとして熱心に授業に取り組み、学習成果を上げることができるのだろうか。どうすれば生徒が意欲的に授業に参加し、自ら進んで色々な学習活動に取り組もうとする授業を展開することができるのだろうか。自分の授業はなぜ生徒を惹き付けることができないのだろうか。教師なら誰もがこのような疑問に悩んだことがあるのではないだろうか。このような共通の悩みを打開する手段として、授業分析・評価法の研究と実践を推奨したい。実際に自分の授業を公開しそれを記録して、授業観察者および自分自身で自分の授業を分析し、評価することによって、これまでは見えてこなかった自分の授業展開上の問題点が発見され、授業改善の方策が得られることを期待している。

立命館大学大学院言語教育情報研究科では、英語教育学プログラムのカリキュラムの一つとして、毎年「英語授業分析指導演習」の講座を開講してきた。本論はその受講生と共に研究討議を重ね、英語教育における良い授業、良い教師に求められる要件とは何かを検討し、授業分析法と評価法の流れを概観し、考察を加えながら、日本における授業分析と評価の観点をまとめたものである。

授業分析には量的分析と質的分析が必要であるが、授業中に起こる生徒と教師のすべてを記録し、それを再現しながら科学的に分析することによって教師自身が自分の指導法を見直し、生徒の反応や生徒と教師、あるいは生徒同士の相互作用を観察することが可能となる。授業分析・評価法は教師自身及び生徒の問題点を発見し、その原因を究明して対処法を工夫することによって、授業を具体的に改善するための科学であると言える。

## I. 授業の構成要素

特定の教科に限らず、一般に授業とはどのような要素によって構成されているのだろうか。その主な要素とは、学習のニーズと目標、授業に参加する学習者、学習の教材、その教材を用いて授業を展開する教師、そして授業が行われる学習環境の5点がある。学習のニーズと目標は、学習者自身の個人的な目的や目標だけではなく、学習者の家族の要求や夢、所属する学校や地域社会が求め目指すものがあり、これらは都道府県の教育委員会、そして日本の国策としての教育方針が示す教育目的と目標がその根底に存在していると考えられる。英語の授業を構成する大きな要素として第一に考えなければならないのは、大きな夢とその夢の実現のために必要な学習ニーズを持った学習者がある。彼らは肉体的、知的・能力的、性格的、情緒的、心理的、文化的、そして家庭や地域社会の生活環境など諸条件の影響によって生まれたそれぞれの個人差を持った存在であることを常に意識していなければならない。そして授業を担当する教師についても、言語能力、適性、教育歴だけではなく、学習者と同様の個人差があることは否定できない。

次に学習教材には、特に公立の中学・高校においては、検定教科書が中心になると思われるが、それに関連した多種多様な補助教具・教材の導入が可能であり、学習項目やトピックに関連し

た補助教材を活用した授業が展開されるであろう。さらに英語を母語とする外国人講師が授業に加わる場合もあり、外国人講師の存在そのものが、異文化理解教育の貴重な生の教材になるのである。

そして学習環境には、授業が行われる教室内の施設・設備の状況や雰囲気、および周辺的环境が重要であることは当然であるが、学校全体の雰囲気や環境と、教職員全員の英語教育に対する考え方と姿勢も、広い意味では授業を構成する要素に含まれるであろう。そしてこれらの構成要素を踏まえて、教師が授業の中で生徒とのインタラクションをいかに効果的に引き出しながら授業を活性化させているかが、授業評価の基本的観点であると考えられる。

## Ⅱ. 授業分析法の概観と考察

### 1. 授業研究

授業とは上記のような授業の構成要素が教師によって有機的に組み合わせられ、生徒に計画的に提供され展開される極めて複雑な教育活動である。学校教育の歴史と共に歩んできた従来の授業研究では、教師の授業がどのように展開され、どの程度目標とする学習効果を上げたかという教師側の授業内容と方法、およびその効果が主観的に論じられる研究であったと言える。従って授業中の生徒の反応や教師と生徒、あるいは生徒同士の相互作用や発話内容、さらに生徒の感情的な反応についての調査分析は重要な研究対象ではなかったようである。

これに対して、授業中に起こるすべての発話を客観的かつ詳細に記録し、それを数量的に分析することによって実際の授業の様子を把握し、授業の改善を目指す授業分析への試みが始まった。

### 2. 授業分析の歴史

授業分析の歴史は、1950年代から始まる。アメリカの Carroll and Sapon (1959) がその開拓者であると言われている。アメリカ政府は1957年のスプートニク・ショック以来、言語教育の改善を打ち出し、まず初めに教員養成において効果的な指導方法を打ち出すために授業分析を行うようになった。

授業分析の主な方法としては、1970年に Flanders (1970) の Flanders' Interaction Analysis Categories (FIAC)、Wragg (1970) の Interaction Analysis in the Foreign Language Classroom、1971年に Moskowitz (1971) の Foreign language interaction analysis (Flint)、1980年代には Spada (1995) らの Communicative Orientation of Language Teaching (COLT) などが提案された。次にこれらの分析法の概要と問題点について考察を加える。

#### (1) Flanders' Interaction Analysis Categories (FIAC)

Flanders は教師の行動が学習結果にどのような成果を及ぼすのかについて、実際の教室での発話を詳細に記録し、数量化する研究法を生み出した。1950年代に提案された Flanders'

Interaction Analysis Categories (FIAC) では、観察者が授業を実際に観察しながら教師と生徒の発話を分類して所定の用紙に記入し、それぞれの発話量を集計して、教師と生徒の発話内容や教師の指導パターンを抽出して授業を分析することによって、授業の改善を図ろうとするものである。具体的な手法は、授業をビデオに録画し、それを再生しながら全ての発話のスク립トを作成する。3秒ごとにスク립トに斜線を入れ、区切られた発話にカテゴリ番号を付ける。3秒ごとの各発話を次に示す1から10までのカテゴリ番号に従い、所定の表の縦軸と横軸の交差する部分に「正」の字を書き、加算する。発話の分類は次の10項目で行われる。(資料1の1参照)

#### Flandersの相互作用分析カテゴリー

##### **【Teacher talk: Indirect influence】** (教師の発話：間接的影響)

1. Accept feelings (生徒の感情や態度の受け入れ)
2. Praises or encourages (激励や称賛)
3. Accepts or uses ideas of student (生徒の提案の受け取りや活用)
4. Asks questions (教師から生徒への発問)

##### **【Teacher talk: Direct influence】** (教師の発話：直接的影響)

5. Lecturing (講義)
6. Giving directions (指示)
7. Criticizing or justifying authority (しかる・注意する)

##### **【Student talk】** (生徒の発話)

8. Response (質問に対する応答)
9. Initiation (自発的な発言)
10. Silence or confusion (沈黙または混乱)

次に、筆者が担当する「英語授業分析指導演習」を受講した院生の一人(西川 2008)が実際に行った模擬授業を、Flandersのカテゴリー分析のマトリックスを用いてコーディングした自己分析の結果を紹介する。

対象：中学1年生

使用教材：New Horizon I Unit 10 Niagara Falls Part 1

- 本時の目標：1. 助動詞 can (肯定文、否定文) の復習および疑問文の導入
2. can を使って会話ができる。
  3. 海外 (カナダ東部) への興味を持つ。
  4. 旅行英語を少し使えるようになる。

授業時間：30 分間

表1 Flandersのカテゴリー分析法を用いた分析結果

カテゴリー	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1			A		1	1			C		2
2		1		2	3	3		1			10
3				1	1		1				3
4		2		1	5	1		15	1		25
5				10	10	5		3	4		32
6		2		3	2	5	1	8	1		22
7		1				B				1	2
8	1	4	3	5	4	7		1	2		27
9	1	1	D		6						8
10					1						1
A	教師の間接的影響										7
B	教師の直接的影響										23
C	生徒の発言を促進する教師の対応										33
D	生徒の発言に対する教師の対応										32

注：授業中の発話一文を1ポイントとカウント

表2 発話をカテゴリー別に分けた分析結果

教師の発言	間接的影響	①	感情を受け入れること	2
		②	ほめたり、勇気付けること	11
		③	アイデアを受け入れたり、利用すること	3
		④	発問すること	22
	直接的影響	⑤	講義すること	33
		⑥	指示すること	22
		⑦	批判したり、正当化すること	2
			Total	95
生徒の発言		⑧	生徒の発言一応答	28
		⑨	生徒の発言一自発的	8
			Total	36
		⑩	沈黙あるいは混乱	1

注：授業中の発話一文を1ポイントとカウント

表3 教師、生徒の発話のL1、L2の使い分けの割合

教師の発言	教師L1	70	53.44%
	教師L2	25	19.08%
	Total	95	72.52%
生徒の発言	生徒L1	26	19.85%
	生徒L2	10	7.63%
	Total	36	27.48%

注：授業中の発話一文を1ポイントとカウント

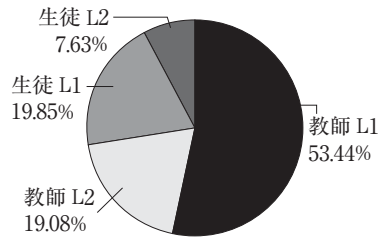


図1 教師、生徒の発話のL1、L2の使い分けの割合

発話は3秒毎の区切りではなく、発話を一文ごとに区切って分析を行った。コーディングの方法は、たとえば発話が上の表の5, 5, 4, 8, 2, 4, 8と続いた場合は、5-5, 5-4, 4-8, 8-2, 2-4, 4-8のように前後2項目を一つの発話チェーンとして組み合わせ、縦(1~10)、横(1~10)のマトリックス上に記入する。発話が同じ項目に該当する場合は、該当する箇所に正の文字を書いて回数を数える。

このような分析を行った院生は、自分が行った模擬授業について、次のように自己分析を行っている。

Flandersのカテゴリー分析のマトリックスを使って、自らの授業のインタラクションがどのような構成になっていたのかを調べた。今回、3秒毎にカウントしなければならない発話の内容は、時間ではなく、発話一文ごとに区切って分析を行った。また、スクリプトは30秒毎に区切ってある。この分析の結果、私の行った授業では「教師の間接的な影響」が極端に少ないことが分かった。これは、生徒の感情を受け入れたり、ほめたり、勇気付けたりするような、生徒を尊重する態度があまり見られなかったことを意味する。また、「生徒の発言を促進する教師の対応」と「生徒の発言に対する教師の対応」は、ほぼ同ポイントであり、教師が言ったことに対して生徒が答え、生徒の発言に対してはお決まりの対応をするという、平坦で盛り上がりのない授業が展開されていたことが明らかになった。また、30秒の間ずっと教師の発話だけという区切りが多数あったことなど、教師の発話が授業全体の約73%を占めており、教師主導の授業であったことが数値的にも導き出された。

以上のように数量的に見て、自分の行った授業には教師の発言が多すぎ、生徒の自発的な発言がほとんど見られない一方通行的な授業になっていたことが明らかとなった。授業を終えた後、自分が話しすぎていたこと、生徒の発話をうまく促せていなかったことなど、反省はしたものの、分析の結果、このように数字に出て明らかになると、大変分かりやすく、どの点を特に注意していかなければならないかが目に見えて分かる。

この授業分析の方法にはいくつかの問題点も挙げられる。第一に、教師の発話に関する項目は7つあるが、生徒の発話については2つのみであり、教師の質問に対する生徒の答えが中心

に想定された教師主導型用の授業分析であると考えられる。Flanders の FIAC は外国語の授業に限らず、どの科目の授業においても使用可能なものであったため、特に教師と生徒、あるいは生徒同士のコミュニケーションに必要な相互作用を分析する項目が組み込まれていないことが指摘される。このようなカテゴリーの設定では、生徒の自由な言語活動や、課題についての生徒同士の意見交換など、言語活動になくってはならないコミュニケーション活動を重視したタイプの授業を適切に分析するには限界があると思われる。

第二に、発話のみを分析するので、教師や生徒の表情や動き、教室の雰囲気、沈黙の理由や混乱の原因などの項目が設定されていない。また、生徒の反応に関する詳しい項目がないので、数値では測定できないクラス全体の雰囲気を把握することが困難である。

第三に、発話を各項目に分類する際の判断には主観が入り、観察者によって個人差が出る恐れがある。

第四は分析の手法の問題である。まずは授業を録画し、スクリプトを作成して、3秒ごとにスクリプトに斜線を入れ、区切られた発話に1から10までのカテゴリー番号を付ける。3秒ごとの各発話をカテゴリー番号に従い、所定のマトリックスの縦軸と横軸の交差する部分に「正」の字を書き、加算していく。授業中の発話を3秒単位で区切ることの意義が明確ではない。長時間に及ぶ集計の作業には集中力と忍耐力が必要であり、集計中に混乱や誤算が生じやすいという側面もある。また、カテゴリーが10項目のみであるため、発話がどのカテゴリーに該当するのかを正確に判断しかねる場合も多々発生する。

授業でのコミュニケーション活動や発話のより詳細な分析を行うためには、評価目標に沿ったカテゴリーを追加したり修正したりして、独自の分析システムを開発する必要がある。

## (2) Interaction Analysis in the Foreign Language Classroom

これに対して Wragg は Flanders の FIAC を改良して、対象言語の使用と母語の使用を区別することにより、外国語の授業に特化した分析システム Interaction Analysis in the Foreign Language Classroom を提案した。この方法により、対象言語と母語の発話量を分類して、それぞれの発話量の割合を知ることが可能となった。Flanders の提案した10個の項目を母語によるカテゴリー(1～10)に、対象言語による同じ10個のカテゴリー(11～20)を加え、合計で20個の項目からなるマトリックスを作成し、FIAC と同様の手法で分析を行った。しかし、Wragg の分析法とその分析手法にも FIAC の場合と同様の問題点があると言える。(資料1の2参照)

豊富な教育経験を積み重ね、独自の指導法を確立し、主として英語による教師と生徒のインタラクションを工夫しながら、レベルの高い模擬授業を展開した現職教員の院生(山添 2005)の授業分析レポートの一部を引用する。

対象：商業高校3年生

使用教材：World Trek English Reading Lesson 5 Noise or Sounds Unit 1

本時の目標：1. 騒音 (noise) と音 (sounds) の違いについて理解を深める。

2. 語構成の知識で未知語を推測する。
3. Discourse markers を手がかりにして論理の展開を理解する。

授業時間：50 分間

### ビデオ録画の分析

授業ビデオ発話を書き取り、各発話を分類した。分類は Wragg によるカテゴリーに若干の変更を加えた。(表 4 参照) Wragg では沈黙が一まとめに扱われているが、この部分を作業に取り組んでいるための沈黙と、教師の指示不十分などに起因する混乱のための沈黙に分けて扱った。また沈黙は言語分類が不要のため日本語・英語の区別を行わなかった。

分類は一定時間ごとに区切って行った分類ではなく、一定のまとまりのある発話、たとえば一文(大ざっぱに句点を打てる場所)ごとの分類とした。

分類内容を二言語使用集計マトリックスにまとめ、その内容を教師と生徒の発話カテゴリー別にグラフで比較してみると次の図 2、3 のようになる。カテゴリーは「J1」「E1」のように日本語のものは J を、英語のものは E を付けて表した。

教師の発話で頻度が高いのは「指示」「講義」「発問」の順でともに英語によるものが多い。生徒の発話は英語による応答が圧倒的に多い。これは教師の模範音読の後について練習しているものも含まれるので、単語リストの発音練習などの回数に影響していると思われる。

生徒からの質問もあるが、ほとんどの場面で日本語で行われている。英語での「生徒の発想」10 に対して、日本語による「生徒の発想」は 50 で、日本語での質問がかなり高率である。

各言語の割合を概観するために、発話内容を「教師の英語」「教師の日本語」「生徒の英語」「生徒の日本語」「作業沈黙」「混乱沈黙」「笑い」の区分で整理しグラフ化すると、図 4 のようになる。

表 4 Wragg の発言カテゴリーを修正

	カテゴリー分類		カテゴリーの説明
	日本語	英語	
教師の発言	1	11	感情の受容
	2	12	賞賛・勇気づけ
	3	13	発想の受容
	4	14	発問
	5	15	講義
	6	16	指示
	7	17	批判・修正
生徒の発言	8	18	応答
	9	19	生徒の発想・質問
沈黙その他	10		作業中の沈黙
	100		指示不十分のための沈黙
	110		笑い



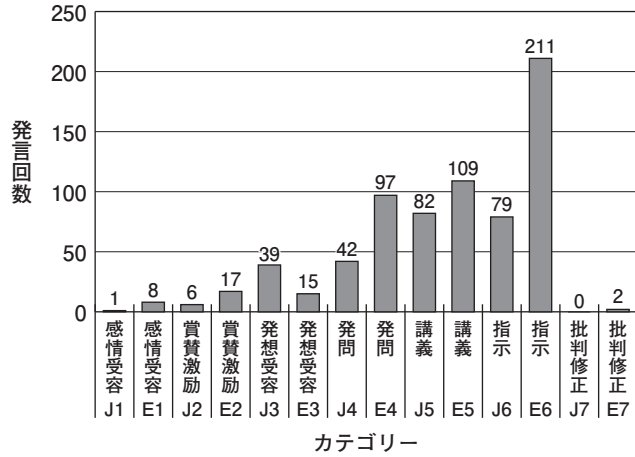


図2 教師の発言

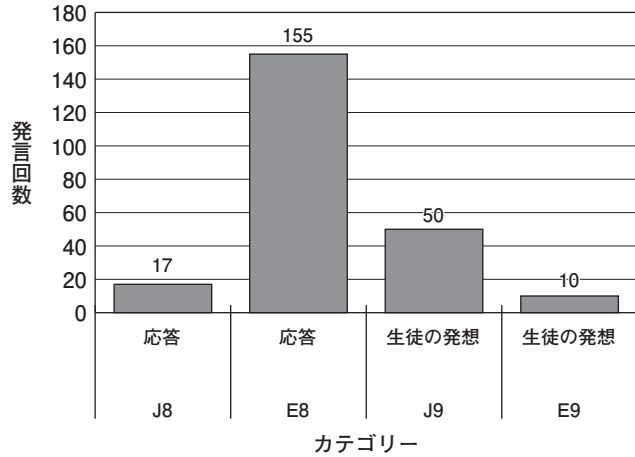


図3 生徒の発言

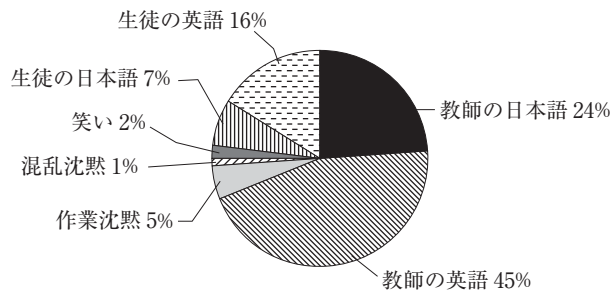


図4 授業中の発話割合

「教師の英語」は45%、「教師の日本語」は24%で、英語と日本語の比率が約2対1になっていることが分かる。同じように「生徒の英語」16%、「生徒の日本語」7%で、英語と日本語の比率が約2対1になっていることが分かる。できるだけ授業中に英語の使用比率を高めようという目標は実現できているように思われる。教師が授業中に英語を使う比率を高めていけば、生徒も英語を使う場面が増えていく可能性を示しているように思える。

しかし、「教師の発話」と「生徒の発話」という観点で見ると「教師の発話」69%、「生徒の発話」23%という割合で、教師：生徒＝3：1という教師主導の実態が見えてくる。「模擬授業ビデオ transcript」を見てみると、教師の発問や指示はほとんどの場面で2回～3回の繰り返しが行われている。生徒の理解を助ける意味で、発問や指示を繰り返すことは有効な手段であるが、ほぼ条件反射的に繰り返していると思われる場面も見られるため、この「繰り返し癖」が上記の図4から読み取れる「教師の喋りすぎ」の一因になっているとも考えられる。

また今回の模擬授業では、単語リストの音読、発音練習にかなりの時間を割いているので、「生徒の英語」の中にはこの部分も含まれている。したがって、英語の文を音読したものに限定すると、「生徒の英語」の割合が少なくなってくる。また生徒が自ら作り出した英語の使用の場面は皆無に近い状態であった。音読という基礎練習を重要視するあまり、生徒の自己表現による英語使用の場面が作り出せなかった。このことは今回の模擬授業のみならず、日常行っている授業にも当てはまる点であるので、生徒の自己表現活動の時間を増やせる工夫を検討したい。

今回は模擬授業を録画しての分析であったため、所定の50分が経過した時点で、「授業を行う」意識から、日頃の授業内容の「手順を説明する」ことに視点が移ってしまい、50分のタイマーの合図があつてから日本語が多くなり、生徒が行う活動についても生徒役の学生さんに向かって「・・・したということにしてください」という発言が目立つようになった。

生徒（役）から質問が出た部分は、できるだけ授業内容と関連させていこうとする姿勢が見られた。生徒からの発言はできるだけ授業に関連づけていくことで、当該生徒の授業当事者感覚を高めていくと考えられるので、授業成立が難しいような状況にあっても、できるだけ拾い上げていけるように今後も努めたい。

今回の模擬授業では、高校生の発言を越えると思えるレベルの発言（デシベル；ノイズと音楽など）も見られたが、様々な分野の話題が扱われている教科書を使用する教科の特性もあり、すべての話題に精通していることは不可能だが、日常から様々な分野への知的好奇心のアンテナを張り巡らしておくことが重要であることを再確認させられた。教師自身が説明できない分野（あるいはできない振りをして）は、得意な生徒にまかせて説明をしてもらうことも時には必要である。

### ビデオを見ての感想

英語が多いなという印象をまず感じたが、同じ質問や指示を繰り返していることには今

回初めて気がついた。普段から教師主導型の授業をしているだろうと薄々感じていたが、やはり圧倒的な時間を教師の喋りに費やしていることが分かり、今後は生徒の発話時間を増やす方向へ改善を図りたい。

### (3) Foreign language interaction analysis (Flint)

次に 1971 年に Moskowitz が提案した Foreign language interaction analysis (Flint) は、Flanders の FIAC をもとにして、より正確かつ適切なフィードバックを可能にするため、授業における感情の重要性に注目し、教師や生徒の言動の変化を明らかにしようとした。講義、説明、指示など教師主導による直接的な授業よりも、生徒の自主的な活動を取り入れ、生徒の感情を重要視して褒めたり励ましたりし、母語よりも学習言語による話しかけを多くするような間接的な働きかけの多い授業によって、生徒の学習意欲を高めることの重要性を唱えた。教室内で発生するインタラクションを分類して、最も効果的な指導法を探り、良き外国語教師に求められる条件を提案しようとして 11 項目を追加し、以下のようなカテゴリーを設定している。(★印が追加項目である。)

#### Teacher talk (Indirect influence)

1. Deals with feelings
2. Praises or encourages
- ★ 2a. Jokes (冗談)
3. Uses ideas of students
- ★ 3a. Repeats student response verbatim (生徒の反応を一字一句繰り返す)
4. asks questions

#### Teacher talk (Direct influence)

5. Gives information
- ★ 5a. Corrects without rejection (反応の受け入れと誤りの訂正)
6. Gives directions
- ★ 6a. Directs pattern practices (文型練習を指示する)
7. Criticizes student behavior
- ★ 7a. Criticizes student response (生徒の応答を評価する)

#### Student Talk

8. Student response, specific
9. Student response, open-ended or student-initiated
10. Silence
- ★10a. Silence...AV (視聴覚教材の視聴による沈黙)
- ★11. Confusion, work-oriented (学習活動に関する戸惑いや混乱など記録不可の状態)
- ★11a. Confusion, non-work-oriented (学習活動には直接関係のないざわめきや雑談など)
- ★12. Laughter (笑い)

★13. Uses the native language (母語の使用)

★14. Nonverbal (非言語的な反応)

(Adapted from Moskowitz 1971)

この Flint System では、これまでのように単なる指導法の評価のためではなく、教室における様々な行動について詳しく描写するための項目が追加されている。これによって教師は生徒に対して直接的な指導のしかたをしているのか、間接的な指導なのか、また批判的なのか、それとも生徒のアイディアに対して受容的であるかなどを確認することが可能である。また、即時に自分の指導に対するフィードバックを得ることができ、さらに効果的な指導方法を発見することができる。

この Flint 方式を用いて自分の模擬授業を分析した院生 (松尾 2006) は、次のような分析結果と授業改善への試案を述べている。

対象：高校3年生

使用教材：Prominence English Reading Lesson 7: "Getups"

Voice Oral Communication II Lesson 16 「ディスカッション」

本時の活動：Reading で扱った Lesson 7 の Follow-up、本文の重要なポイントについてのディスカッション。英語の歌を聴いて本文との接点を考えてみる。

授業時間：30 分間

表 5 Moskowitz (1971) FLINT の分類

教師の発言 (間接的影響) 一応答	1: 感情・態度の受容 2: 称賛・激励 2a: 冗談 3: アイディアの受容・使用 3a: 学習者の発言のくり返し 4: 発問
教師の発言 (直接的影響) 一指導	5: 講義・説明 5a: 間接的な訂正 6: 指示・方向づけ 6a: 文型練習 7: 批判・正当化 7a: 誤りの明示的な訂正
学習者の発言	8: 単純応答 8a: 一斉練習・音読 9: 自主的発言
沈黙	10: 沈黙・ポーズ 10a: テープやビデオの聞き取り
混乱、記録不能状態	11: 複数の学習者が参加 11a: 完全なカオス状態
歓喜の表現	12: 英語による笑い 12a: 非言語的な反応

(佐野正之『アクション・リサーチのすすめ』より抜粋 (2000, p195-196))

表6 項目別発話回数の集計

1	2	2a	3	3a	4	5	5a	6	6a	7	7a	8	8a	9	10	10a	11	11a	12	12a	Total
10	10	7	70	82	143	49	5	118	0	2	4	44	20	95	17	0	1	0	7	2	686

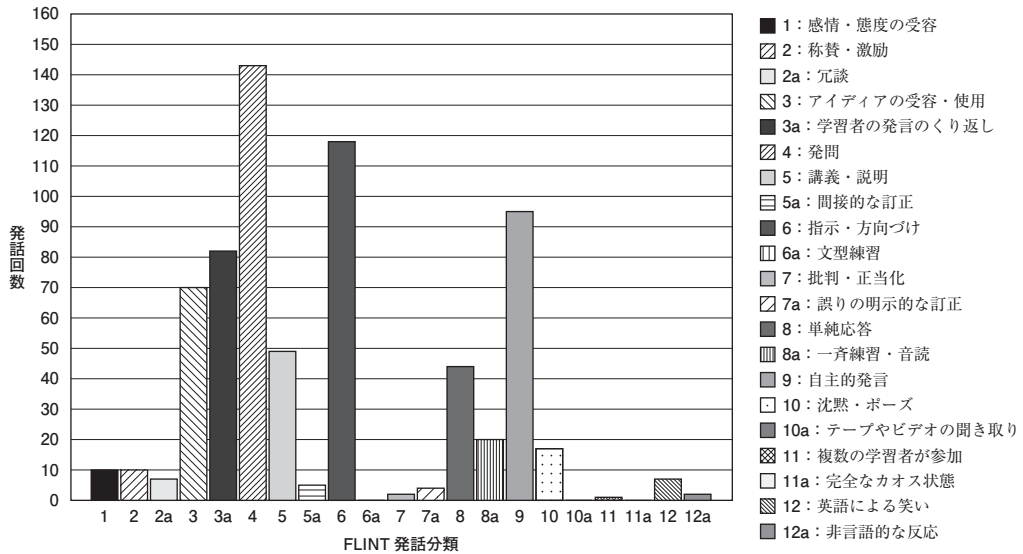


図5 授業内発話回数と分類のグラフ

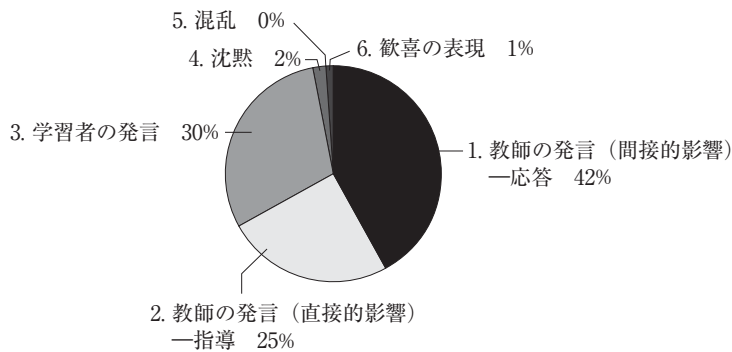


図6 教師と学習者との発言回数の比率

これらのグラフを見ると、ディスカッションのクラスであるにもかかわらず、教師の発言が圧倒的に多いことがわかる。応答と指導をあわせると、教師の発言は全体の67%にも及んでいる。それに対して、学習者の発言はこの半分にも満たない30%である。この30%の中には音読活動なども含まれるので、自主的な発言はより少ないということになる。しかしながら、表6や授業の SCRIPT を見てみると、教師の発言がここまで伸びた理由は

圧倒的な「4：発問」の多さによるところであることがわかる。これは、ディスカッションを円滑に進めようとするあまり、生徒の発話を促すためにいくつもの質問を投げかけた結果である。一人の生徒の発言に対し、なぜそう思うか、ほかの人はこの発言をどう思うか、などとひとつの発言に上乘せする形でいくつもの質問をしている。ディスカッション中の教師の発問数を減らすひとつの手段として考えられるのは、ディスカッションの司会を生徒に任せることである。教師は、ディスカッションが思うように進んでいなかったり、生徒が英語での言い方がわからずに困っている時などにだけサポートをする役に回れば、生徒の発言の機会を増やし、なおかつ教師の発言を最小限にとどめることができるだろう。

これらのグラフにおいてもう一点反省点として述べておきたいことは、「2：称賛・激励」の少なさである。私は今までの授業で生徒をたくさん褒めているつもりでいた。しかしながら実際に数字で表してみると、驚くほどに小さい数字であった。ディスカッションの授業ということもあり、(録画されたビデオの)スクリプトを見てみると、生徒の発言をより広げようとする言葉が先に出て、発言のすばらしさや、英語をうまく話せたことなどに対して、褒めるという行為を怠っている。ビデオを見てみると、“OK”や“Yes”を高く、大きな声で言っており、生徒の発言に対して肯定的な“OK”や“Yes”であるということはわかるのだが、やはり英語の教師として、生徒を言葉で称賛することをもっと心がける必要があると感じた。

最後に教師の発言回数を大きくした要因のもうひとつとして、「6：指示・方向付け」の多さがある。ワークシートなどに示されていることを、言葉を変えて、言い回しを変えて説明しながら、このような方向で考えてみてはどうか、という提案的な方向付けや、活動中に何をしたらいいのかよく理解できない生徒に対し、助け舟を出す意味で、言葉を変えた英語で指示を出しているという場面がスクリプトからよくわかる。これは生徒に対して、よりわかりやすくするためではあるが、言葉は違っていても何度も同じことを繰り返す必要がないような場面もある。また、ワークシートがあるにも拘わらず、これだけ多くの指示や方向付けをしなければならなかったということは、ワークシートの質問の仕方や、授業運びの中に、または教師の英語のレベルが学習者と合っておらず、一度では理解できないという問題が考えられる。教師の指示や方向付けをより明確にし、一度で理解できるような英語で説明できれば、教師の発言回数を減らし、生徒により多くの時間を与えることができるであろう。

#### (4) The Communicative Orientation of Language Teaching (COLT)

1980年代以降には、量的なデータから質的なデータの収集が目されるようになった。また、指導技術に特化した分析から、授業内で発生する現象を教師と学習者がどのように捉え、それが授業にどのように影響していくのかを分析する方向へと転換した。心理学の分野では、行動主義心理学から認知心理学への転換が始まり、それに呼応するように、それまでのオーディオ・リンガル教授法に対して、Communicative Language Teaching (CLT) のようにコミュニケーショ

ン活動を重視した教育観が広まってきた。1984年にAllenとNina Spadaによってコミュニケーション重視の授業観察法であるThe Communicative Orientation of Language Teaching (COLT)が提案された。

COLTはPart AとPart Bの2つのパートに分かれているが、Part Aは教室で行われる言語活動を観察しながら、自由に記述する方式である。その分析項目は7つの大項目に分かれており、その中に1～33までの小項目が設けられている。(資料2-1参照)大項目の内容は

1. 時間
2. 発話内容
3. 参加者の形態（クラス全体、グループ、個人）
4. 発話内容（クラス運営、言語活動、その他）
5. 発話の主体（教師/テキスト、教師/テキスト/生徒、生徒のみ）
6. 使用スキル（4技能）
7. 教材（種類、話者・筆者）

である。Part Bは授業を録音・録画したテープを1分ごとに区切って再生し、1～40までの該当する小項目にマークする作業を2名以上で行うものである。大項目の内容には(資料2-2参照)

1. 使用言語（母語/目標言語）
  2. 情報ギャップ
  3. 発話の長さ
  4. フィードバック
  5. 生徒・教師の発話に対する応答
- さらに生徒のみに適用される項目として
6. 談話の開始
  7. 言語形式・発話内容に対する反応

があり、教師用と生徒用で若干項目が異なるが、ほぼ同様のフォーマットである。

受講生の山口（2008）は自分の模擬授業について量的分析を行った後、さらにCOLT Part Bを用いて質的分析を行い、次のような分析結果を提出している。

対象：高校1年生

使用教材：Genius English Course I Revised Lesson 2

本時の活動：1. 本文の内容理解度の確認

2. 関係代名詞の主格と所有格の用法の導入・理解

3. 意味語群単位の音読練習

授業時間：30分間

Spadaなどによって開発されたCOLTは、Part A、Part Bからなる。Part Aでは教室内の言語活動と指導過程をリアルタイムで観察・記録する方法であり、いくつかのカテゴリー

表7 指導案における指導計画と模擬授業での実施状況の比較

活動	指導計画 (分)	模擬授業での実施状況
1. あいさつ	1	13 秒
2. Worm-up (Small Talk)	2	1 分 30 秒
3. 前時の復習 (内容確認)	5	1 分
4. 本文の導入	5	8 秒
5. 本文内容	12	12 分 52 秒
6. 言語材料の導入と練習	12	15 分 30 秒
7. 音読活動	4	省略
8. Section 1 のまとめ	7	省略
9. 授業のまとめ	2	省略

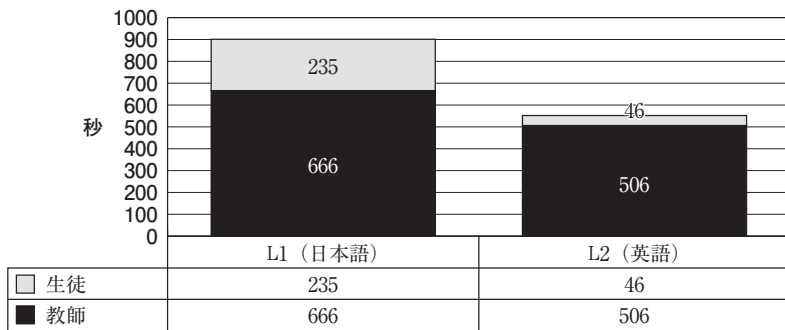


図7 教師と生徒の発話量

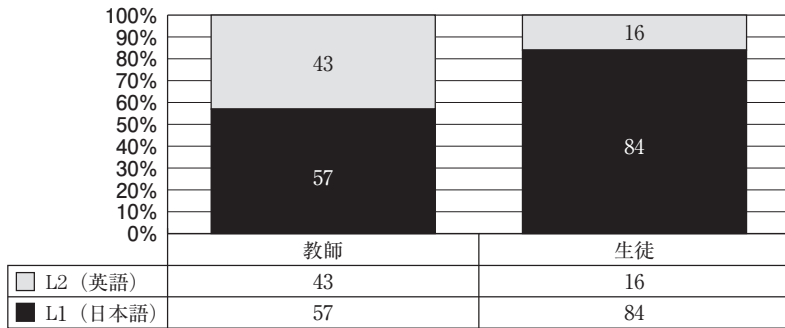


図8 L1 と L2 の発話量の割合

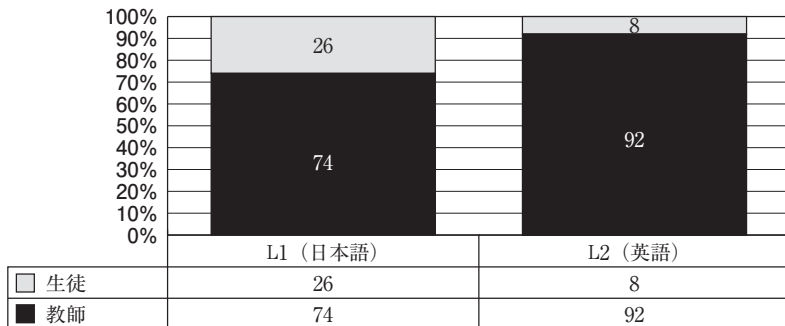


図9 教師と生徒の発話量の割合



別に計測することにより、指導と学習効果などを見ることができるとのことである。分析方法が比較的容易なことから、Part A を用いた研究は近年多くなされている (河合他、2007)。

一方、Part B では教師と学習者、または学習者と学習者との実際の発話をいくつかのカテゴリーに分類して分析することによって、授業全体のコミュニケーションへの指向性など、より詳しい授業の特徴を明らかにすることができる (河合他、2007)。

このレポートでは、より詳しい授業の特徴を明らかにするため、COLT の Part B を用いて分析をする。また、分析にあたっては Spada (1995) を参考にして行う。Spada (1995) には分析を行う際の表がついており、私はそれを日本語にして自分自身が使いやすいようなかたちに直して今回の分析を行う。

COLT Part B の分析方法は1つではない。このレポートの分析では以下の手順で分析を行う。

- (1) 模擬授業のトランスクリプトを1分間毎に区切る。1分間も満たないうちに次のアクティビティに移った場合はそこで区切り、また最初から1分間ごとに区切るという作業を繰り返す。
- (2) 区切ったスクリプトを活動ごとに COLT Part B の表を使って分析する。活動が1分以内のものはターンごとに当てはまる項目にチェックを入れる。1分以上続くものは1分の分析を行った後、2分の間隔をあけて次の1分間の集計を行う。これは Spada (1995) が提案している方法である。
- (3) 分析表をもとに自分の行った授業の特徴を考察する。

本来ならば授業の流れとチェックのついている項目の割合を数的データで示すのがよいのかもしれないが、私の今の段階では正確な量的分析を行うことが難しい。

今回行った模擬授業を大きく分けると、内容重視の活動と、形式重視の活動がある。まず、Warm-up や復習、内容理解の確認などは内容重視の活動といえるが、そのなかで気になったのは生徒の「反復 (35. Repetition)」が少ないことである。(資料 2-2 参照) もちろん音読活動を行えば反復は自然と行われるかもしれないが、私が行った活動の中にも教師や他の生徒の後に続いての反復練習などを取り入れることで、生徒の英語による発話量を増やすことができたと考えられる。また、会話のやり取りの中で教師は生徒の発言に対する「応答 (37. Comment)」が多い。これは学校の授業では多く見られることかもしれないが、教師が中心になって授業を進めているということを示している。このことと関連して、生徒による「情報の要求 (22-25. Information gap)」も非常に少ない。生徒が自発的に発言することがあまりできていないということである。

関係代名詞の導入と解説を行った活動は、形式重視の活動といえる。ここでの特徴は、教師も生徒も圧倒的に日本語が多くなっているという点である。量的分析では、日本語は文法項目のときに多用されていたことが明らかになった。文法説明を英語でするのは難しすぎるとも言われているが、簡単な部分は教師がなるべく英語を使用する工夫をすべきであろう。そのことで生徒もより英語に慣れ親しむことができる。

分析を行ってみると、COLT Part B の欠点が見えてくる。河合他 (2007) も述べている

ように「確認」という項目がないことはその1つである。教師が生徒に理解を直接問うために確認は欠かせないし、生徒が教師に自分の理解を確かめるためにも確認は欠かせない。そのことから考えても、「確認」という項目があるとより詳細な分析ができるのではないだろうか。また、この分析では、生徒の発する言葉に含まれない意味（納得する、納得しない、楽しい、楽しくない）などが伝わってこない。実際に録画された映像を見て文字におこすのであれば、授業の雰囲気や伝わるような分析と一緒に行うことで、COLT Part B をさらに効果的な分析方法として用いることができるのではないだろうか。

また、COLT Part B の項目に分類する際に、私自身の中で迷いがあったため一貫した分類になっていないという点で、COLT Part B を今後も活用していくのであればさらに先行研究などを読み、COLT に関する理解を深める必要があると感じた。

さらに、日本語教育プログラム所属の受講生の柴山（2009）は、日本語の動詞のグループ分けについての授業を主として英語で行ったが、COLT の持つ課題について次のように述べている。

COLT の課題としては、分析項目が口頭によるコミュニケーション活動、特に情報ギャップ活動（information gap activities）に特化されている点である。したがって、目標言語における対話活動が頻用される授業には適しているが、読み書きを多分に含む授業の分析には適さない。だから、伝統的な日本の語学授業での分析には適さない感がある。たとえば、近年見られるペアによる対話文の音読などは情報ギャップ活動ではない。そのため、Part B では分析の対象とはならない。このように、Flint がオーディオリンガル法に傾倒していたように、COLT は CLT に傾倒しているため、日本の語学教室の授業観察に適用するには限界がある。

### 3. アクション・リサーチについて

これまで述べてきた授業分析法は、授業中の生徒と教師の発話量の測定値による分析であったが、授業観察評価には数値による量的分析だけでは見えてこない要素がある。これまで行われてきた方法には、ジャーナル、授業日誌、プロトコール分析、記述式授業観察記録、質問紙によるアンケート調査、面接法、授業カンファレンスなど、授業分析の目的に応じて様々な方法が用いられてきた。最近では質的アプローチによる新しい授業分析の方法として、アクション・リサーチが注目されるようになってきた。アクション・リサーチの実施手順として佐野（2000）は次のように述べている。

直面している問題を明らかにし、生徒や教師の実態を把握して、その対応策を考える。次に、その対応策を実施して、変化の様子を観察やアンケート、テストで調査する。調査結果を分析し、満足のゆく結果でなければ、再度、問題点を調査して対策を考え、以下同じ様な手順を繰り返す。ある程度の結果が出たら、これまでの研究結果の過程をまとめて

発表し、客観的な視点から実践を検討してもらい、新たなアクション・リサーチのサイクルを開始する。

本来ならば、本論においてもアクション・リサーチを用いた授業分析を行い、その結果を紹介すべきであるが、同研究科にはアクション・リサーチの研究をテーマにした英語教育学講座が別途開講されているため、本論でこの分野について言及することは控えたい。

### Ⅲ. 授業評価基準の作成

授業中に話された教師と生徒のすべての発話を記録し、その内容によって項目別に分類して数量的に集計する分析法だけでは、発見できない要素があるため、教師と生徒の動きや姿勢、及び必要な能力についての質的な評価が授業改善には不可欠である。

「英語授業分析指導演習」講座では、Brown（2007）の41項目に及ぶチェックリスト（資料3）を参考にしながら、授業評価の観点、評価基準、観察記入シートの作成などについて科目担当の筆者と受講生との研究討議を行い、授業観察の観点を作成してきた。以下に示す観点は過去6年間に渉る研究成果を、受講生の辻（2009）の協力を得て集大成したものである。

今回作成した授業観察・評価観点項目採点表は1. 授業計画・準備、2. 授業運営・指導、3. 教師の資質、4. 総合評価・コメントの4つのパートから構成されている。採点にあたり、評価者に1、2、3、4、5、5+という6つの尺度基準で評価することとした。5+は「申し分無いほどよくできている」、という尺度である。5は「大変よくできている」という尺度であるが、5+を加えることで、現在の授業運営能力の向上を更に目指すべきかどうかを詳細にわたって判定してもらい、今後の授業改善に役立てるという意図で付け加えることになった。

#### 1. 授業計画・準備

授業計画・準備は（1）教材と（2）授業の2項目において、授業開始までにどれほど計画と準備が行われていたかを測る観点である。良い授業には十分な教材研究と指導計画が欠かせない。準備の段階で指導案、教材の準備、さらには板書、指名方法といった細部にいたるまでよく練って指導計画が立てられているかを分析・評価する。

#### 2. 授業運営・指導

授業運営・指導では、教師・授業者が授業中の指導を通じて、学習目標に対して効果的な学習ができるように運営・指導ができているかを観察し、分析する観点である。（1）Presentationでは、発言・板書・配布資料など教師が学習者に提示する全ての英語・日本語について、適切な表現を適切な分量で理解しやすく提示できているかを観察する。（2）指示・指名では、教師・授業者が生徒の能力やクラスの現状を理解して、適切な指名・指示ができているかに焦点を置く。（3）Interactionでは英語科授業で大切なinteractionが適切に行われ、生徒の学習に繋がっているのかを採点する。ここでは、やりとりされた内容・言葉・表情に注意して観察することができる。（4）Feedbackでは生徒の活動や誤りに対して適切な応答をし、訂正・賞賛ができているか否か

を観察する。(5) Class Management では、生徒が学習に取り組みやすい雰囲気となるような工夫がなされているか否かを観察する。(6) 指導法では、指導内容に応じて効果的な指導法を用いて授業を行っているかに注目する。

### 3. 教師の資質

教師の資質では、実際に授業を行う教師の資質について観察・分析する。授業で実際に行われるやりとりを観察するだけではなく、意識的にその教師が英語教育者に必要な (1) 言語能力を有しているか、あるいは教育者としての (2) 人間性を備えているかを観察することで、教師の教育に対する姿勢を測ることを目的としている。この項目は実際に現れる点数で評価するわけではないが、授業を受ける側にとって理解しやすい授業であったのかどうか、また教育者としてふさわしいのかを評価する項目となっている。教師の言語能力は言うまでもないが、生徒にこの内容をぜひ理解してほしいという教えることへの情熱と、生徒を愛し育もうとする気持ちは、授業の節々に滲み出るものである。このような項目を1回の授業で測ることは難しいし、評価者による判定の個人差が出ることも否定できないが、1つの授業内で観察できる範囲で、教師の英語力や教育に対する姿勢を評価することを目指す。

### 4. 総合評価・コメント

総合評価・コメントは、評価者が感じたことを自由に記述するスペースとして設けたものである。評価者にとってどの項目にも当てはまらない意見は、必ず何かあるはずである。評価者の多様な声を文字で受け取ることができるように設けたものである。

この観点項目採点表は、尺度による量的調査とコメントの記入による質的調査が可能であり、多様なデータと意見から総合的な授業分析が行えるように作成した。

## IV. 授業観察・評価観点項目採点表

授業中の教師と生徒の姿を可能な限り具体的に、客観的に観察し、記入できるように観察者の立場を考慮しながら、以下のような小項目を設定した。

### (1) 授業計画・準備

評価スケール

#### 1) 教材準備

1 2 3 4 5 5+ NA

- ① 教科書の内容をしっかりと理解し、読み込んでいるか。
- ② 補助教材が見やすく、丁寧に作られているか。
- ③ 補助教材が枚数・印刷状況などの確認を経て準備されているか。
- ④ マルチメディアの使用法を理解した上で準備ができているか。

#### 2) 授業準備

- ① 具体的な本時の学習目標が設定されているか。
- ② 適切な時間配分で指導案が作られているか。
- ③ 学習目標に合わせて4技能を交えた内容の指導案が作られているか。
- ④ 生徒の現状をよく把握した内容で指導案が作られているか。

- ⑤ 板書、指名方法といった細部の計画を伴った指導案が作られているか。

(2) 授業運営・指導

1) Presentation

- ① 説明が明瞭、簡潔であるか。  
② 生徒の身近な話題や、興味、生活に則した明確な例文を使って指導項目を導入しているか。  
③ 生徒が理解しやすい英語を適切な量で使っているか。  
④ 指導内容に応じた日本語・英語の使い分けを行っているか。  
⑤ 場面に適した補助教材を使っているか。  
⑥ 補助教材の使用タイミングや提示方法が適切で効果的であるか。  
⑦ 内容が整理され、丁寧でわかりやすく板書されているか。  
⑧ 板書に誤字・脱字などがないか。

2) 指示・指名

- ① 指名方法（個人、グループ、順番など）に工夫があるか。  
② 生徒の能力を考えた指名がなされているか。  
③ 指名に偏りがいないか。  
④ 生徒の名前を覚えているか。  
⑤ 活動内容や活動上の注意点など、例題を示しながらわかりやすく、的確な指示ができているか。

3) Interaction

- ① 表情豊かに生徒に発言を促しているか。  
② 生徒の質問や発言に適切に応答しているか。  
③ 生徒を一層やる気にさせるほめる言葉、励ましの言葉を適切に使っているか。  
④ 教師側だけの一方的な話にならず、生徒の発言機会が適切に設けられているか。  
⑤ 生徒の興味や関心を引く話題や、ユーモアを交え、対話を活性化させる努力をしているか。  
⑥ 立ち位置など生徒との間の距離やポジションに工夫があるか。

4) Feedback

- ① 間違いの訂正が適切に行われているか。  
② 理解度を確認する場面（小テストなど）を設けているか。  
③ 活動に対するコメントや評価を与える場面があるか。  
④ 生徒の発言・反応に対し、適切な応答ができているか。

5) Class management

- ① 学習に取り組みやすいムードを作っているか。  
② 学習規律を意識した発言をしているか。  
③ 机間巡視により生徒の状況把握ができているか。

- ④ 能力の低い生徒への配慮、声かけがあるか。
- ⑤ 能力の高い生徒への声かけがあるか。
- ⑥ 時間管理ができているか。
- ⑦ 授業の進行や展開で起こるアクシデントに対する適応力があるか。
- ⑧ 場面に応じた適切な指示がなされているか。

6) 指導法

- ① 指導内容に応じ、適切で、バラエティのある指導法が見られるか。
- ② 4 技能を適宜用いた指導をしているか。
- ③ 効果的な発音指導を行っているか。
- ④ 効果的なリスニング指導を行っているか。
- ⑤ 効果的なスピーキング指導を行っているか。
- ⑥ 効果的なリーディング指導を行っているか。
- ⑦ 効果的なライティング指導を行っているか。
- ⑧ マニュアル以上の独創性を用いた指導を行っているか。

(3) 教師の資質

1) 言語能力

- ① わかりやすい話し方、適切な声の大きさ、早さで話すことができるか。
- ② わかりやすく適切なクラスルーム・イングリッシュを使うことができるか。
- ③ 正しい表現や発音で英語を話すことができるか。
- ④ 学習教材のテーマや内容に対するバックグラウンド的な知識を持っているか。
- ⑤ 日頃より外国語に興味があるか。
- ⑥ 資格試験などに対して積極的な取り組みの姿勢があるか。
- ⑦ ボディーランゲージ、アイコンタクトなど非言語表現を用いることができるか。

2) 人間性

- ① 生徒に教えるのが好きである。
- ② 生徒と話すのが好きである。
- ③ 優しさと厳しさを兼ね備えている。
- ④ 一般的な知識を十分持っている。
- ⑤ 生徒の興味を引くような知識や話題を持っている。
- ⑥ 話し相手に笑顔を与えることができる。
- ⑦ 生徒の反応に対する忍耐力がある。

(4) 総合評価

- ① なるほど度 (生徒側の理解度)
- ② PASSION 度 (教師の教えることへの情熱度)
- ③ LOVE 度 (英語が好きで、授業を楽しく行っているオーラ度)

コメント：

## V. 「英語授業分析指導演習」講座と院生による 模擬授業・授業分析・評価の演習について

### 1. 授業の概要と目的

「英語授業分析指導演習」講座では「英語教育学Ⅰ」で学んだ理論と指導法を踏まえて、特別クラスまたは受講生を生徒と見立てたクラスで受講生自身が模擬授業を行い、その授業についての観察および授業分析を行うことによって、授業の改善とより高度な指導力を養成することが目標であった。授業の観察と分析方法については、文献による理論的な研究を行った後、本研究科院生が過去に行った模擬授業や、豊かな経験を積んだ現職教員の院生、およびこの分野の専門家によるモデル授業のビデオを教材とした。授業の構成、指導技術、教師と生徒とのインタラクションやフィードバックの仕方、生徒が用いた学習ストラテジーや教師と生徒の発話時間総数の比較分析などにより、授業分析と評価の基礎的な能力を養成することが第一の目的であった。さらに、授業分析評価項目を作成し、実際の模擬授業を観察しながら量的な評価を行い、それに質的な評価を加えながら、授業カンファレンスを成功させることが第二の目的であった。

### 2. 模擬授業について

「英語授業分析指導演習」の受講生に、中学校または高等学校の英語検定教科書の中から自由に教材を選択させ、模擬授業を行わせた。同じ講座の受講生、また時には関心のある他の講座の院生を招いて生徒役をしてもらった。模擬授業実習に当たっては、授業計画や指導法について指導教員と十分な事前準備を行った。特に教材選択、指導案の作成、教具の操作法のチェックなどが重要であった。

一人 30 分の授業時間で、その風景を筆者がビデオ録画し、そのコピーを次週の授業で授業を行った院生に提供した。各院生は自分の授業の全てを何度もビデオで再現しながら、授業中の教師と生徒による全ての発話を忠実に書き出し、スクリプトを作成した。また、生徒役の院生は前述の授業評価観点項目採点表に評価値とコメントをつけて、授業実施者にフィードバックした。このような資料を受け取った院生は、Flanders の FIAC、Wragg の 2 言語分析システム、Moskowitz の Flint、Spada 他による COLT など、いずれかの授業分析法そのまま、あるいは自己流に修正した分析法を用いて自分の授業を分析し、自己評価を行い、反省点と授業改善に対する見解を総合的にまとめて報告している。過去 6 年間に 50 編を超えるペーパーが提出された。

“Good morning, everyone” から始まる 30 分間の授業の全発話を書き出す作業は、相当忍耐力のいる作業であったようだ。しかし、どの学年でも受講生全員がこのような模擬授業を行い、自分の授業分析と自己評価をすることによって、近い将来、英語科教員として小・中・高の教育現場に進出し、少しでも良い授業をしたいという強い決意と熱意が感じられた。全員で作成した授業分析・評価観点項目採点表には 65 の小項目があり、実際に授業を観察しながらすべての項目に評価点を記入するのは不可能に近いと、模擬授業終了後、しばらく評価やコメント

を記入するための時間を設定し、授業に対するコメントを述べる授業カンファレンスを行った。最後に院生からのコメントを踏まえて、指導担当者である筆者から総合的なコメントを与えて模擬授業のまとめとした。

### 3. 英語科教員に求められること

現職教員として中学・高校などに採用され、実際に教育現場での仕事が始まると、校務分掌やクラブ指導、生徒の生活指導など、教科以外の仕事に追われ、教材研究や補助教材の準備、授業終了後の提出課題の処理、さらに授業分析と自己評価、授業に関する同僚との教科会議などに費やせる時間が殆どないという教育現場の実情をよく聞かされる。教育環境や条件には地域差があると思われるが、どのような教育環境や状況であろうとも、生徒に学習目標を示し、その実現のために頑張ろうという意欲を持って学習に取り組ませるためには、担当教員の総合的な指導力と教育に対する姿勢と情熱が何よりも肝要である。

教員自身が発声・英語の発音・音読・シャドウイングなどの訓練を日常的に行い、豊富な語彙力と語法・学習英文法、英文学などに精通するための地道な努力が大切である。教師の総合的な英語力・実践的な運用力のみならず、学習スタイルやストラテジー、学習不安の原因とその軽減方法などについての基礎知識を備えていることが求められる。

Jack C. Richards (2002) は *CURRICULUM DEVELOPMENT IN LANGUAGE TEACHING* の Chapter 7 の Appendix 5 Qualities and competences of a good English teacher で Murdoch (1997) の調査項目を紹介している。そこでは大項目として ELT COMPETENCIES, GENERAL TEACHING COMPETENCIES, KNOWLEDGE AND ATTITUDES が設定されている。また、Brown (2007) は *Teaching by Principles* の Chapter 23 Continuing Your Teacher Education で Good Language-Teaching Characteristics について Technical Knowledge, Pedagogical Skills, Interpersonal Skills, Personal Qualities の 4 項目を設定している。語学の授業では、学習内容を的確に教えるための高いレベルの指導力が必要であるが、授業における生徒と教師、或いは生徒同士の相互作用を活性化させるためには、生徒と教師がお互いに安心し、信頼して話しかけられる対人関係をうまく保つことが肝要である。Brown (2007) は上記の Interpersonal Skills について次の 7 項目を掲げているので、原文のまま引用する。

19. Is aware of cross-cultural differences and is sensitive to students' cultural traditions.
20. Enjoys people; shows enthusiasm, warmth, rapport, and appropriate humor.
21. Values the opinions and abilities of students
22. Is patient in working with students of lesser ability.
23. Offers challenges to students of exceptionally high students.
24. Cooperates harmoniously and candidly with colleagues (fellow teachers).
25. Seeks opportunities to share thoughts, ideas, and techniques with colleagues.



また、田崎(1964)は ITEMATIZED CHECK LIST として、目標と指導法に分けて合計 22 のチェック項目を作成しているが、その中にも次のような対人関係と相互作用に関する項目が見られる。

個人差に対する配慮がなされている。

学習者の精神的レベルにあった指導法である。

学習者に自信と安定感を与えている。

学習者の優劣に対する配慮がなされている。

学習の雰囲気は和やかである。

教師と学習者との協力体制がよくできている。

教師の位置についての配慮がなされている。

学習者は自主的に活動に参加している。

教師の態度・音声に配慮がなされている。

## おわりに

外国語教育メディア学会（LET）は 2011 年に学会創立 50 周年を迎え、記念すべき全国研究大会が 2011 年 8 月 3～5 日、横浜市立横浜サイエンス・フロンティア高等学校において盛大に開催された。この学会創立 50 周年を記念して『外国語教育メディア学会 50 年の歩み』が発行されることになり、筆者の英語教育に対する想いが掲載されている。この想いは、筆者の英語教育に対する変わらぬ信念でもあるので、本論の終わりの言葉としてここに再度述べることにする。

言語教育に携わる者には多くの厳しい資質が求められているが、筆者は常々次のような事柄が重要であると考えている。第一に、優れた言語教師には、専門分野に関する理論的知識と、当該言語を高いレベルで運用する能力、学習者の興味と関心を惹きつける効果的な指導技術、そして常に高い目標を目指した教師自身の向上心と直向きな努力が必要である。さらに、教えることへの情熱と生徒一人一人を見守る温かい心と誠実な対応によって、心の通い合った信頼関係（rapport）を築く事が必要である。これからの言語教育には、学習言語に関する知識と運用力のみならず焦点を当てた教育ではなく、学習者の心の発達に注目し、他人の人格を尊重し、社会の一員として逞しく生きる力と、国境を越えた人類の文化と生命を尊重する精神を育て、さらに個人の能力と潜在的可能性を最大限に伸ばそうとする教育の原点への復帰が求められる。教育には、知識・情報を伝授し技能を磨く「教」と、互いの人格を尊重し、成長過程にいる学習者を望ましい姿に進化させ、健全な人間性を育む「育」の両面があると考えている。

初期段階における言語教育では、スポーツにおける体力トレーニングのように、すべての能力の基礎となる学力と、弛まぬ訓練の積み重ねが必要である。基本的学習事項を理解しながら反復練習を積み重ねることにより、必要な場合には基本的な語彙や構文や発音が無意識のうち正確に産出できるところまで教え込むことが重要である。これらの積み重ねがあつてこそ、発話目的と内容や場面・状況に応じた適切な発話方法を考えることに集中することができるの

である。そして、学ぶことによって、「分かった」「できるようになった」「やればできるんだ」という自信と喜びと達成感を学習者に与えることが大切である。言語教育の原点に戻り、音声と文字の両面において基礎学力を着実に養成する骨太の語学教育が、学校ぐるみで取り組まなければならない。外国語教育に導入されるメディアは、基礎的な学習を個別に行い、適切なフィードバックによって学習への興味付けと挑戦への意欲を高め、学習事項を疑似コミュニケーションの場で応用する機会を提供する補助的ツールとして活用されるべきものである。

最近の高校・大学生の中には、英語の基礎的運用力が身に付いていないだけでなく、英語を学ぶことへの動機付けが弱く、その必要性すら感じていない学生が増えているのが現状である。日本のような EFL の言語環境では、一般に教室を一步離れると、学習した運用能力を実際のコミュニケーションに用いる機会も必要性も殆どなく、教科としての学習で終わってしまうのが現状である。このような状況を少しでも改善するためには、高校・大学レベルにおいては、テキスト中心の授業だけに終わらず、学習者に英語を必要とする機会を与え、学生が自ら積極的に取り組もうとする学習環境と課題を提供することが必要である。日常生活での簡単な会話はできても、自分のアイデアを英語で1分間以上話すことのできる学生は減多に見あたらないのはなぜだろうか。多くの日本人学生は国内の社会問題や海外の状況・国際問題などに対する関心が低く、自文化や異文化に対しても興味関心を示さないため、母語でさえ論理的に述べる内容や論法を持ち合わせていないのではないかと。情報化が飛躍的に進んだ今日では、その気になれば、いくらでも外国の情報や世界の人々の意見が瞬時に入手できる。また海外の人々と英語で意見交換をすることも可能である。国内で英語で face-to-face のコミュニケーションを行う機会が得にくいのであれば、インターネットなどの情報メディアをフルに活用して行う CMC (Computer-Mediated Communication) を奨励し、国際的な場面で通用するコミュニケーション能力を養成するための教材と指導法の研究が、今後日本の英語教育に求められる主要な課題ではないだろうか。

「英語授業分析指導演習」を履修した院生は、若干名が小学校の英語担当教員として、現職教員は所属している中学や高校に戻り、半数以上の若い修士課程生達は新任教員として中学や高校に勤務し、大いに頑張っている。中には他大学の後期博士課程に進み、博士号を取得した者もいる。彼らがそれぞれの道において日本の将来の発展に向けて努力し、さらに日本の将来を担う明るくて積極的な青年を育成するために日夜最善を尽くしてくれることを期待している。

最後に、この度滞りなく定年退任されることになった Dr. Ratzlaff 教授には、立命館大学全体の言語教育活動をはじめ、政策科学部および大学院言語教育情報研究科における英語教育に大いにご活躍頂き、これまで長年にわたり心こもった熱心な指導にご尽力頂きましたことに対し、心から感謝申し上げます。この退任記念論文集に貴重な頁を頂き、院生と共に研究を重ねてきた成果を発表する機会を与えて頂き、誠に有り難うございました。

参考文献

- 青木昭六 (編著) 2002. 『新学習指導要領に基づく英語科教育法の構築と展開』、現代教育社
- 青木昭六 (編著) 2002. 『新しい英語科教育法—理論と実践のインターフェイス』、現代教育社
- 垣田直巳他 1986. 英語教育学モノグラフ・シリーズ『英語の授業分析』、大修館書店
- 笠島準一 2005. 『New Horizon 1 English Course』、三省堂
- 河合靖他 2007. 「COLT Part B による観察方法とその問題点」『メディア・コミュニケーション』53、pp.99-113
- 久保田章他 2003. 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』、大修館書店
- 佐野正之 2000. 「アクション・リサーチの定義と方法」『アクション・リサーチのすすめ—新しい英語授業研究』第2章、大修館書店
- 柴山浩美 2009. 「日本語教師に必要なものとは—英語授業分析演習から何を学ぶか」『英語授業分析指導演習報告書』、立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 杉森幹彦 2008. 『英語授業分析指導演習第1回講義資料』
- 杉森幹彦 2010. 「学会と共に歩んできた50年」『外国語教育メディア学会50年の歩み—LLAからLETそして未来へ』、12-15. 外国語教育メディア学会、金星堂
- 高梨庸雄・高橋正夫 1990. 『英語教育学概論—新しい時代の英語教授法—』、金星堂
- 高梨庸雄 (編) 2005. 『英語の「授業力」を高めるために』、三省堂
- 高橋正夫 2000. 『英語教育学概論 改訂新版』、金星堂
- 田崎清忠 1964. 授業チェックリスト『英語教育』13.8、11月号、4-6 大修館書店
- 谷口紘子 2008. 英語授業分析指導演習最終レポート『英語授業分析指導演習報告書』立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 辻 かな子 2009. 「英語授業分析指導演習を振り返って」『英語授業分析指導演習報告書』立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 中森誉之 2000. 「授業研究の変遷と今後の展望」佐野正之編『アクション・リサーチのすすめ—新しい英語授業研究』第7章、大修館書店
- 中森誉之 2009. 『学びのための英語学習理論—つまずきの克服と指導への提案』、ひつじ書房
- 西川奈代 2008. 「授業分析とその結果」『英語授業分析指導演習報告書』、立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 松尾由紀 2006. 「英語授業分析」『英語授業分析指導演習報告書』、立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 村野井仁、千葉元信、畑中孝実 2001. 『実践的英語科教育法 総合的コミュニケーション能力を育てる指導』成美堂
- 村野井仁 2006. 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 山口香織 2008. 「英語の授業分析項目の作成と模擬授業の分析」『英語授業分析指導演習報告書』立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- 山添孝夫 2005. 「英語授業分析演習模擬授業—ビデオ録画の分析と感想」『英語授業分析指導演習報告書』立命館大学言語教育情報研究科杉森研究室
- Allen, J.P.B., Fröhlich, M. and Spada, N. 1984. The communicative orientation of language teaching: an observation scheme. In Handscombe, Orem and Taylor (eds.) *On TESOL '83: the question of control*, 231-252. Washington, D.C.: TESOL.

- Allwright, D. 1988. *Observation in the Language Classroom* New York: Addison Wesley Longman.
- Brown, H. D. 2007. *Teaching by Principles --An Interactive Approach to Language Pedagogy* New York: Pearson Education, Inc.
- Carroll, J.B. & Sapon, S. 1959. *Modern Language Aptitude Test (MIAT)* New York: Psychological Corporation.
- Chaudron, C. 1995. *Second Language Classrooms: Research on teaching and learning* New York: Cambridge University Press.
- Flanders, N.A. 1970. *Analyzing Teaching Behavior* New York: Addison-Wesley.
- Gaynor, R. & Dunn, L. & Terdal, M. 1997. Evaluating the COLT scheme as a classroom observation instrument. *Tokai University The bulletin of the foreign language center* 18, 1-9.
- Mackey, A & Gass, S. M. 2005. *Second Language Research Methodology and Design* Mahwah, New York: Laurence Erlbaum Association, Inc., Publishers.
- Moskowitz, Gertrude 1971. Interaction Analysis: A New Modern Language for Supervisors. *Foreign Language Annals* 5(2).
- Moskowitz, Gertrude 1976. The classroom interaction of outstanding foreign language teachers. *Foreign Language Annals* 9.
- Murdoch, G. 1997. What makes a good English language teacher? In *TESOL Arabia 1997 Third International Conference*, vol. 11, Conference Proceedings Selected Papers, March. 96-108.
- Patrick, A. & et al. 1983. *The communicative orientation of the language teaching: an observation scheme* Ottawa: Social sciences and humanities research council of Canada.
- Richards, Jack C. 2002 *CURRICULUM DEVELOPMENT IN LANGUAGE TEACHING* Cambridge University Press.
- Seedhouse, P. 2004. *The Interactional Architecture of the Language Classroom: A Conversation Analysis Perspective* Malden: Blackwell Publishing.
- Spada, Nina & Fröhlich, Maria 1995. *COLT: Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme -- coding conventions and applications* Sydney National Center for English Language Teaching and Research.
- Wajnryb, Ruth 2003. *Classroom Observation Tasks---A resource book for language teachers and trainers* Cambridge University Press.
- Wallace, Michael 2001. *Training Foreign Language Teachers---A reflective approach* Cambridge University Press.
- Wragg, E.C. 1970. Interaction Analysis in the Foreign Language Classroom. *Modern Language Journal* 54(2).

英語授業分析指導演習 第2回資料

資料1の1 英語授業分析法：Flanders' Interaction Analysis Categories

事例研究1 Flanders' Interaction Analysis Categories 集計マトリックス

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1										
2										
3										
4										
5										
6										
7										
8										
9										
10										

資料1の2 E.C.Wragg の発言カテゴリー

事例研究2

E. C. Wragg の二言語使用集計マトリックス

	日本語による発言										英語による発言										Total	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
1																						
2																						
3																						
4																						
5																						
6																						
7																						
8																						
9																						
10																						
11																						
12																						
13																						
14																						
15																						
16																						
17																						
18																						
19																						
20																						
Total																						

資料 2-1

COLT PART A

Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme

© Spada & Fröhlich 1995

School ..... Grade(s) ..... Observer .....

Teacher ..... Lesson (min.) ..... Visit No .....

Subject ..... Date ..... Page .....

TIME	ACTIVITIES & EPISODES	PARTICIPANT ORGANISATION			CONTENT							CONTENT CONTROL		STUDENT MODALITY					MATERIALS													
		T- S/C	S- S/C	Choral	Group	Indiv.	Manag.	Language			Other topics	Teacher/text	Teacher/text/Student	Student	Listening	Speaking	Reading	Writing	Other	Type		Source										
								Procedure	Discipline	Form										Function	Discourse	Socioling.	Narrow	Broad	Text	Audio	Visual	L2-NNS	L2-NS	L2-NSA	Student-made	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33

資料 2-2

COLT PART B: COMMUNICATIVE FEATURES

Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme

© Spada & Fröhlich 1995

School ..... Date of visit .....

Teacher ..... Subject ..... Coder .....

A	E	M	TEACHER VERBAL INTERACTION																	STUDENT VERBAL INTERACTION																			
			Target language		Information gap		Sustained speech	Reaction to form/message	Incorporation of student utterances							Target language	Information gap		Sustained speech	Form restriction	Reaction to form/message	Incorporation of student/teacher utterances																	
			L1	L2	Giving info.	Request. info.			Minimal	Sustained	Message	Correction	Repetition	Paraphrase	Comment		Expansion	Clarif. request				Elab. request	Discourse initiation	L1	L2	Giving info.	Request. info.	Ultra-minimal	Minimal	Sustained	Choral	Restricted	Unrestricted	Form	Message	Correction	Repetition	Paraphrase	Comment
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40

資料 3

432 CHAPTER 23 Continuing Your Teacher Education

Figure 23.1. Teacher observation form: observing other teachers

---

**Teacher Observation Form A: Observing other teachers**

---

Keep in mind these criteria when observing a teacher. Circle or check each item in the column that most clearly represents your evaluation: 4=excellent, 3=above average, 2=average, 1=unsatisfactory, N/A=not applicable. You may also write comments in addition to or in lieu of checking a column.

**I. PREPARATION**

- |   |             |
|---|-------------|
| 1. The teacher was well-prepared and well-organized in class.<br>Comment:     | 4 3 2 1 N/A |
| 2. The lesson reviewed material and looked ahead to new material.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |
| 3. The prepared goals/objectives were apparent.<br>Comment:                   | 4 3 2 1 N/A |

**II. PRESENTATION**

- |   |             |
|---|-------------|
| 4. The class material was explained in an understandable way.<br>Comment:                     | 4 3 2 1 N/A |
| 5. The lesson was smooth, sequenced, and logical.<br>Comment:                                 | 4 3 2 1 N/A |
| 6. The lesson was well-paced.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 7. Directions were clear and concise and students were able to carry them out.<br>Comment:    | 4 3 2 1 N/A |
| 8. Material was presented at the students' level of comprehension.<br>Comment:                | 4 3 2 1 N/A |
| 9. An appropriate percentage of the class was student production of the language.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |
| 10. The teacher answered questions carefully and satisfactorily.<br>Comment:                  | 4 3 2 1 N/A |
| 11. The method(s) was(were) appropriate to the age and ability of students.<br>Comment:       | 4 3 2 1 N/A |
| 12. The teacher knew when the students were having trouble understanding.<br>Comment:         | 4 3 2 1 N/A |
-

- 
- |  |             |
|--|-------------|
| 13. The teacher showed an interest in, and enthusiasm for, the subject taught.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |
|--|-------------|

### III. EXECUTION/METHODS

- |  |             |
|--|-------------|
| 14. There were balance and variety in activities during the lesson.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 15. The teacher was able to adapt to unanticipated situations.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 16. The material was reinforced.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 17. The teacher moved around the class and made eye contact with students.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 18. The teacher knew students' names.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 19. The teacher positively reinforced the students.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 20. Student responses were effectively elicited (i.e., the order in which the students were called on).<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 21. Examples and illustrations were used effectively.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 22. Instructional aids or resource material was used effectively.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 23. Drills were used and presented effectively.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 24. Structures were taken out of artificial drill contexts and applied to the real contexts of the students' culture and personal experiences.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |
| 25. Error perception.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 26. Appropriate error correction.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |

**(Continued)**

---



---

**IV. PERSONAL CHARACTERISTICS**

- |   |             |
|---|-------------|
| 27. Patience in eliciting responses.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 28. Clarity, tone, and audibility of voice.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 29. Personal appearance.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 30. Initiative, resourcefulness, and creativity.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 31. Pronunciation, intonation, fluency, and appropriate and acceptable use of language.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |

**V. TEACHER/STUDENT INTERACTION**

- |   |             |
|---|-------------|
| 32. Teacher encouraged and assured full student participation in class.<br>Comment:                   | 4 3 2 1 N/A |
| 33. The class felt free to ask questions, to disagree, or to express their own ideas.<br>Comment:     | 4 3 2 1 N/A |
| 34. The teacher was able to control and direct the class.<br>Comment:                                 | 4 3 2 1 N/A |
| 35. The students were attentive and involved.<br>Comment:   | 4 3 2 1 N/A |
| 36. The students were comfortable and relaxed, even during intense intellectual activity.<br>Comment: | 4 3 2 1 N/A |
| 37. The students were treated fairly, impartially, and with respect.<br>Comment:                      | 4 3 2 1 N/A |
| 38. The students were encouraged to do their best.<br>Comment:  | 4 3 2 1 N/A |
| 39. The teacher was relaxed and matter-of-fact in voice and manner.<br>Comment:                       | 4 3 2 1 N/A |
| 40. The teacher was aware of individual and group needs.<br>Comment:                                  | 4 3 2 1 N/A |
| 41. Digressions were used positively and not overused.<br>Comment:                                    | 4 3 2 1 N/A |
-